編集後記

梅のつぼみがほころび始めた。街の中に彩りが生まれ、春の訪れを知らせている。

この春は別れの春だ。閉校はあくまで、学校再編に伴う発展的なものであるが、現実はそのような綺麗な言葉の中に収まりきるものではない。

なぜ母校がなくなるのか。心の拠り所であり、青春の３年間あるいは４年間を過ごした証明である場所を失わねばならないのか。心の中にわだかまるやるせない思い、言いようのない複雑な思いを、まだ整理できずに抱えている卒業生や関係者はたくさんいる。

しかしありがたいのは、この最後の在校生の明るさだ。入学前から覚悟していたためでもあろうが、閉校を冷静に受け止め、寂しさをそれぞれに消化し、前向きに未来を見つめている。閉校間際の学校であることを忘れさせる生徒たちの笑顔、笑い声、素直な言動、活発で若さあふれる姿に私たちは随分と救われた。

西高はしなやかな学校だ。履正中学校から鹿児島県鹿児島高等学校、鶴丸高等学校夜間部・通信教育部、日新高等学校と、さまざまな校名が沿革の中に登場する。鹿児島西高等学校として開設されてからも、定時制夜間・定時制昼間・通信制・全日制という複数の課程、普通科・商業科・衛生看護科・農業経営科という複数の学科が設置され、絶えず変化してきた。常に時代のニーズに応え、学びを必要とする人の力になってきたのだ。そのような歴史を振り返れば、今また柔軟に姿を変え、明桜館高等学校へとバトンを渡していくことも、西高らしい変化の一つなのかもしれない。

今回の閉校記念誌の編纂にあたっては、まず、鹿児島西高等学校の歴史と、在籍した生徒や職員の様々な思い出を記録し、往時を偲ぶ縁とするとともに、卒業生の母校に対する誇りを新たにし，明日への力を生み出すものとなることを目指した。多くの人に手にとっていただき、本校の歩みと、それを支えてきた方々の思いを知っていただく手がかりとしていただければ幸いである。

鹿児島西高等学校が閉校する意義。私たちはこれからその答えを確かめたい。歴史を引き継いでいく明桜館高等学校の歩みと、鹿児島県全体の教育の未来に期待を寄せ、筆を置きたいと思う。

平成２４年３月　　閉校記念事業実行委員会記念誌係

鹿児島県立鹿児島西高等学校 閉校記念誌

《発行》
鹿児島県立鹿児島西高等学校閉校記念事業実行委員会
2012（平成24）年3月

《印刷》
朝日印刷株式会社